

Number.10
2011/3

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

News Letter

- 特集記事1
国際シンポジウム
「映画と演劇におけるピクチャレスク」
- 特集記事2
スーザン・アレン・マニング氏による講演会
「アメリカにおける舞踊研究の現在」

演劇・映像の国際的教育研究拠点



- 活動報告
- 西洋演劇研究コース P3
 - 日本演劇研究コース P5
 - 芸術文化環境研究コース P5
 - 東洋演劇研究コース P6
 - 映像研究コース P6
 - 舞踊研究コース P7
- 新刊紹介 P7
- イベントカレンダー
編集後記 P8

特集記事 ① 報告

国際シンポジウム「映画と演劇におけるピクチャレスク」

2011年1月17日(月)・18(火)・19(水) 会場：早稲田大学小野記念講堂(小野梓記念館地下2階)

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」主催の国際シンポジウム「映画と演劇におけるピクチャレスク」が、2011年1月17、18、19日の三日間にわたり開催された。映画と演劇を「ピクチャレスク」の観点から捉えるという、映画学と演劇学双方にとって新たな挑戦となった本シンポジウムは、ヴァリエティに富む研究テーマと、その学術的なクオリティの高さが国内外の研究者の注目を集め、成功裡に閉幕した。

17日冒頭のリュック・ヴァンシェーリ准教授(リヨン第2大学)の講演「ピクチャレスク批判、あるいはその映画の残存」では、現代の映画の中に「ピクチャレスク」に対する美学的批判の流れが存在する事が提示された。とりわけ重要なものとして、マーク・ルイスの風景映画『三月初旬、アルゴンキン・パーク *Algonquin Park, Early March*』(2002年)に見られる緩やかに移動する空間が、「絵画的なもの」の力を解放ないし更新していると論じられた。次に、演劇博物館の所蔵する絵画資料をふんだんに用いた児玉竜一教授(本学文学学術院)の講演「絵画から書割・書割から映画美術」では、歌舞伎において人形振りと呼ばれる特殊演出で利用される極端な遠近法の書き割りに、人形浄瑠璃舞台の背景が関係していること、さらには、演劇(歌舞伎)の書き割りが、初期日本映画の背景にも多分に影響を与えていることが論じ

られた。さらに、本シンポジウムの企画者である小松弘教授(本学文学学術院)の講演「映画の二次元・絵画の二次元」では、「映画がいかなる意味において絵画と類似しているのか」という本シンポジウムの核となる問題について、19世紀末から1920年代後半までの無声映画史に即した考察が行われた。初期ドキュメンタリー映画研究家のステイーヴン・ボトモア氏による講演「初期のノンフィクション映画におけるピクチャレスク—カメラマンの貢献」では、1915年以前のノンフィクション映画の技術的、芸術的な質の高さの背景として、初期映画の撮影技師の多くが写真に携わっていたことが明らかにされた。稀少価値のある絵画的な無声映画を取り上げた映画上映では、目下、国際的な活躍を見せている柳下美恵氏によるピアノ伴奏が、この上なく会場を盛り上げていた。

日は変わり、18日冒頭のカスパー・チューベア准教授(コペンハーゲン大学)の講演「際立つ構成—オランダの無声映画における視覚モデルとしての絵画の使用」では、デンマークの無声映画における著名な絵画の効果的な使用法について、とりわけ、カール・Th・ドライヤーの映画とヴィルヘルム・ハムースホイの絵画との関連について分析が行われた。次のピエール・フランツ教授(パリ第4大学)の講演「18世紀における演劇と絵画モデル」では、演劇と絵画をめぐる考察の一例として、画家ダヴィッドと演劇との関わり合いが



取り上げられた。新古典主義の演劇性から着想を得ていたダヴィッドの絵画は、名優タルマや舞台美術家や作家にもまた影響を与えていた。こうした中で見ることに重きを置いた演劇性が生まれるのであるが、それは、美学的、イデオロギー的、政治的意味を持った演劇性であることが指摘された。掉尾を飾る武田潔教授（本学文学学術院）の講演「映画の中の絵画—光、持続、音、そして画家の身体」では、映画作品に現れる絵画と画家の四つの主題系、すなわち、色と光、静止と運動（凝縮と持続）、画と音、画家の身体—隠蔽と顕現に見られるそれぞれの共通点と相違点が析出された。こうした共通点と相違点が映画作品の中で遭遇する時、そこにはある種の「不可思議さ」が現出すると論じられた。また、「描かれた歌舞伎—演劇博物館所蔵役者絵のデータベースと考証」と題して桑原博行氏（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）が行ったプレゼンテーションは、演劇博物館の役者絵コレクションを全ての研究者に開かれたものとする画期的なものであった。

最終日には、7名のGCOE研究生による発表が行われた。その研究生の発表を巡り、研究生と4名の招聘講師との間で繰り広げられた二時間にも及ぶ「ディスカッション」は、い

わば研究生への集団指導の様相を呈しており、「演劇・映像の国際的教育研究」を謳う当拠点の方向性に見合う、またとない機会となった。（研究助手 大傍正規）

■2011年1月19日：グローバルCOE研究生による発表

「藤田嗣治が手掛けた舞台美術—1924年バレエ・スエドワ公演『風変わりなコンクールを中心に—』

佐野勝也（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）
「未完の絵画を撮ること—『マルメロの陽光』における絵画」

宮本明子（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）
「エヴゲーニィ・パウエルにおけるセノグラフィー」

小川佐和子（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）
「初期ハリウッド映画が描いた日本の風景

—『Dragon Painter』（1919）を事例として—」

志村三代子（早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了）
「銃後のピクチャレスク『ハナコサン』（1943年、マキノ正博）：

歌い、踊る戦争プロパガンダ」

紙屋牧子（日本大学大学院博士課程満期退学）
「初期バレエ・リュス作品（1909-13）における

画家による舞台美術と舞踊の関係」

北原まり子（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）
「映画での劇的なピクチャレスク：黒澤明『乱』をめぐる」

マートライ・ティタニラ（早稲田大学大学院博士課程修了）
ディスカッション（研究生の発表内容に基づいて）

特集記事 ② 舞踊研究コース：

スーザン・アレン・マニング氏による講演会 「アメリカにおける舞踊研究の現在」

2011年2月14日（月）～15日（火） 早稲田大学26号館（302会議室）

舞踊研究コースでは、ドイツ表現主義舞踊の創始者の一人であるマリー・ウィグマンの研究で知られ、近年はジェンダー/人種/民族といった政治的な視点から舞踊史を読み解く研究を進めておられるスーザン・マニング氏（ノースウエスタン大学教授）を講師としてお迎えし、「アメリカにおける舞踊研究の現在」という企画のもと、2回の講演会を行った。また16日（水）にはGCOE研究生に対する研究指導が行われた。

タイトル：（クィア）アメリカン・ダンスの生成

日時：2011年2月14日（月） 18:30～21:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス26号館302会議室

通訳：角田美知代

マニング氏は、アメリカのモダンダンスにおけるセクシャリティ/人種/民族の問題を観客の受容に焦点をあて、社会的アイデンティティが異なる聴衆は、同じ舞台からまったく違う意味を受容するということを、例を挙げて説明した。特にそれはセクシャリティにおいて顕著に現れ、同性に対する性的魅力を誇示するような舞台においても、同性に対する性的欲求を持たない聴衆は得てしてまったく気づかない。こうした観客の社会的帰属による受容の乖離の問題を、アメリカにおける同性愛の生の歴史的変化にそって、アメリカモダン

ダンスにおける中心的な男性振付家、テッド・ショーン、ホセ・リモ

ン、マース・カニングム、アルヴィン・エイリーの例を挙げて説明した。そしてゲイであった彼らの作品が、アメリカにおけるゲイを取り巻く社会的な環境の変化と正確に一致していると指摘した。続いてコメンテーターの石井達朗氏のコメント、及び質疑応答がなされ、そこではマニング氏が講演の中で用いた“cross-viewing”という、観客が自身の社会的アイデンティティとは違うコンテキストによる作品の意味を垣間見られることを示す概念とその射程が問題となった。これまで、日本におけるアメリカ・ダンス史においては殆ど問題にされてこなかったセクシャリティと社会と作品の密接な関係が明らかにされ、日本におけるダンス研究に全く新しい視点を提供する貴重な講演会となった。

タイトル：アメリカにおける舞踊研究の発展

日時：2011年2月15日（火） 18:30～21:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス26号館302会議室

通訳：角田美知代

マニング氏はまず「舞踊研究（dance studies）」という用語



には広い意味と、狭い意味があり、舞踊実践における文化的・歴史的・理論的側面を研究する狭い意味での舞踊研究に焦点を当てることを宣言した。そして、アメリカにおける舞踊研究の発展を学会の設立をはじめとする制度の確立と、舞踊研究の方法論の発展について、アメリカ政府による舞踊芸術への援助といった政治的な側面の影響を挙げながら概説した。舞踊研究はまず、バランシンやグラハムといったアメリカにおける新しい舞踊の勃興と共に現れた広範な知識を持つ批評家によって担われると共に、図書館による資料の収集や、舞踊団による失われた作品のリコンストラクションといった活動によって大学の外で発展した。アカデミズムによる研究は、1970年代に制度的に確立し、学会が存在し、学

会誌で研究を発表し、時に賞を受けるということがごく当然の環境として受け止められるようになった。舞踊の実践がモダンダンスからポストモダンダンスへと移行した80年代以降、アカデミズムにおいてはポスト構造主義が広く受け入れられるようになり、舞踊研究の新たな可能性をもたらした。最後に具体的な事例を挙げながら、今後の舞踊研究はますます横断的な方法論が必要とされるようになるという展望で締めくくった。コメンテーターの鈴木晶氏が日本における舞踊研究の状況をまとめられ、質疑応答では舞踊研究の在り方についての意見が交わされ、今後の日本における舞踊研究の発展に大きな刺激となる講演会となった。

(研究助手 渡沼玲史)

活動報告

西洋演劇研究コース：

■西洋全体企画

日時：2011年1月28日(金) 14:45～16:45

場所：戸山キャンパス39号館第7会議室

題目：「迷宮とマニエリスム」

講師：高山宏(明治大学国際日本学部教授)

今回の講演会では、グスタフ・ルネ・ホッケ『迷宮としての世界』文庫化にあたり、訳者の種村季弘氏とともにホッケの紹介者として知られ、下巻に重厚な解説を執筆されている高山宏氏に、改めてホッケの今日的意義を語っていただいた。マニエリスムを巡る様々な議論を出発点に据え、参加者との対話を通じつつ巨視的な視点から文化史全般を横断するという、極めてダイナミックな講演会となった。

■比較演劇研究(秋葉裕一)

12月11日に大阪産業大学で開催されたブレヒト研究会で、秋葉裕一教授が井上ひさしのブレヒト受容について研究発表を行った。ドイツ演劇を専門とするGCOE研究生二名も同研究会に参加し、関西のドイツ演劇研究者と交流を深めた。また2月8日には日独比較演劇研究の一環として、10月から国際交流基金フェローとして来日され、早稲田大学で日本演劇の研究を進めているスタンカ・ショルツ教授を招聘し、秋葉教授と合同の研究報告会を開催した。ショルツ教授は主に井上ひさしと岡田利規について映像分析を交えて報告し、秋葉教授は日本におけるブレヒト受容について語った。

研究報告会：「現代日本の政治劇」

日時：2011年2月8日(火) 16:00～18:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

報告者：スタンカ・ショルツ(トリア大学教授)

秋葉裕一(GCOE事業推進担当者・早稲田大学理工学術院教授)

■ベケット・ゼミ(岡室美奈子)

ベケット・ゼミでは11月20日、12月23日、1月22日、2月25日と定期的に2011年度にグローバルCOEから刊行予定のベケット論集についての打ち合わせの機会を持った。

■身体表象論プログラム(坂内太)

身体表象論プログラムでは、12月22日、1月26日、2月23日と、モダニズムにおける身体表象を巡る読書会を定期的に開催した。

■ポストコロニアル演劇研究会(澤田敬司)

日時：2010年11月10日(水) 18:00～20:00

場所：早稲田大学国際会議場4階共同研究室7

題目：溝口健二『残菊物語』(1939)の音響分析—日本映画における西洋的コードとその否定

発表者：長門洋平(GCOE研究生)

『残菊物語』は、溝口健二の代表作であるのみならず、戦前日本映画を代表する一本として高い評価を受けている作品である。しかしその反面、『残菊物語』に代表されるいわゆる「芸道もの」映画に、家父長制や封建社会に対する批判意識の欠落、とりわけ女性の「自己犠牲」を美化する国策的イデオロギーを見出し、時局迎合的なプロパガンダ映画の一種であるとして批判する声も存在する。今回は聴覚的側面から『残菊物語』を読み直すことによって、如何に同作が当時の戦意高揚映画と趣を異にしているかという点についての考察を試みた。

日時：2011年1月28日(金) 18:00～21:00

場所：早稲田キャンパス6号館318教室(レクチャールーム)

題目：アイヌとカナダ先住民の歌とダンス・ワークショップ

講師：サンティー・スミス、レクボ、床絵美

西洋演劇コース・ポストコロニアル演劇研究会では、継続的に日本と海外の先住民族による現代舞台芸術の展開についての調査・分析を行ってきた。日本で先住民による現代舞台芸術の公演を見る機会は少なく、まして実際にそのエッセンスを体験する機会は限られているのが現状である。今回のワークショップでお呼びした3名の講師はいずれも、伝統的な先住民芸能の表現者であるとともに、現代舞台芸術のアーティストである。今日の先住民舞台芸術の高い芸術性について、参加者自身がそれを実際に体験して知るという本ワークショップは、非常に貴重な機会であった。

■フランス語圏舞台芸術研究プロジェクト(藤井慎太郎)

ロベール・ルパージュ演出『ブルードラゴン』の公演に合わせてモントリオール大学よりジルベール・ダヴィッド教授をお招きし、ケベック演劇をめぐる連続講演会を開催した。

第1回：「ケベック演劇 その歴史と現在」

日時：2010年11月8日(月) 18:00～21:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

第2回：「ケベックにおける文化政策と舞台芸術 ネーションとしてのケベックという視座」

日時：2010年11月12日(金) 15:00～18:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

ケベック演劇は1960年代から大きく変化し、めまぐるしい発展を遂げた。第1回目の講演では、ケベック演劇を芸術として、文学として、制度として、そして政治的・経済的实践として、多角的に分析して頂いた。第2回目は芸術文化環境研究コースと

の共催で、ケベック演劇の変遷と発展について、特に制度という観点からお話し頂いた。

また1月には、国際シンポジウム「映画と演劇におけるピクチャレスク」でのご講演を機に来日されたピエール・フランツ教授による講演会を別途開催した。

日時：2011年1月21日(金) 18:00～21:00

場所：早稲田キャンパス6号館318教室

題目：「マリヴォーをめぐる その思想と現代性」

講師：ピエール・フランツ(パリ第四大学教授)

18世紀前半のフランス演劇について、特にマリヴォー劇を中心にお話し頂いた。「恋の不意打ち」のテーマを当時の社会状況と照らし合わせて論じる切り口は、恋愛心理劇と捉えられがちなマリヴォー劇の研究に新たな方向性と可能性を見出すものであった。

■シェイクスピア・ゼミ(冬木ひろみ、本山哲人)

日時：2010年11月20日(土) 15:30～17:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

題目：「シェイクスピア本文と『読み』について」

講師：金子雄司(中央大学文学部教授)

本講演では、本文研究の歴史の概略にふれながら、現代の校訂本が孕む問題とその「読み」について、*Othello* から具体例を挙げて論じられた。扱うテキストが作者の執筆した原稿なのか、筆写者の作成したものなのか、劇場台本として使用されたものなのかで、上演の意味は変わってくる。そのような観点から考えれば、書誌学研究はテキスト上演の最も根本的な問題と関わっているといえることができる。シェイクスピア書誌学研究の重鎮の一人であり、日本シェイクスピア協会の会長でもある金子氏の講演は、研究生たちがこれから研究を行っていくためのとても重要な基礎、出発点となった。講演後の質疑応答の時間においても活発な議論が交わされた。

日時：2010年12月8日(水) 18:30～20:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

題目：Rubbing at Whitewash: Prejudice, Race and Religion in *The Merchant of Venice*

講師：マリオン・ウィン=デーヴィス(英国サリー大学英文学部教授)

『ヴェニスの商人』を論じる際、ユダヤ人迫害の問題を避けることはできないが、実はカトリック教徒迫害も重要な要素となっている。この作品は、信仰心を「白塗り」して覆い隠す必要のあった時代背景を念頭に書かれたものである。ルネサンス期の女流作家からマーガレット・アットウッドまで幅広い分野の研究で知られているウィン=デーヴィス氏が、シェイクスピアが生まれ育ったストラットフォードのギルド教会を手掛かりにして、よく知られたこの作品を全く新しい視点から読み解くという非常に有意義な講演会となった。

日時：2011年1月29日(土) 15:30～17:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

題目：「黒澤明のシェイクスピア受容」

講師：芦津かおり(神戸大学大学院人文学研究科准教授)

黒澤明のシェイクスピア映画は、その世界的評価という点で、日本におけるシェイクスピア受容を論じる際には避けて通れない。しかし、それだけでなく、映画化における原作の位置づけという問題を考える上でも重要である。今回の講演会では、日本におけるシェイクスピア受容を精力的に論じてきた新進気鋭の芦津かおり氏に黒澤映画についてのシェイクスピア原作の位置づけをダイナミックに論じていただいた。

■オペラ/音楽劇の総合的研究(丸本隆)

オペラ研究会では、月に1～2回の研究会を中心に活動を行っている。国内だけでなく海外からも研究者を招聘し、活発に議論する場を設けている。2010年11月以降に行われた研究会は以下の通りである。

日時：2010年11月17日(水) 17:00～19:00

場所：早稲田キャンパス8号館412教室

題目：「Takarazuka Girls' Opera: 大正生まれの歌劇団にみる『オペラ』への意識と実践」

講師：奈加靖子(元宝塚花組・歌手)

本研究会では音楽学校時代の貴重な資料とともに声楽の授業

や音楽学校の様子が紹介され、宝塚という世界が内側から考察された。

日時：2010年12月11日(土) 14:00～16:00

場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

題目：「ヴェルディとドイツ人：ナショナリズム、音楽史、そして『オペラ研究』の出現」

講師：グンドウラ・クロイツァー(イェール大学音楽学部准教授)

司会：丸本隆(GCOE事業推進担当者・早稲田大学教授)

通訳：福中冬子(GCOE研究協力者・東京藝術大学准教授)

クロイツァー准教授は学際的なアプローチでオペラ研究の先端を切り開いている。今回の講演では近年のオペラ研究の発展と19世紀以降の音楽史学との複雑な関係性が考察対象とされ、19世紀末のイタリア・オペラのドイツでの受容が国勢とイデオロギーに深く根差したものであることが指摘された。オペラ研究の今後の展望を考える上でも重要な講演会となった。

日時：2010年12月14日(火) 17:00～19:00

場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

題目：「霧のワグナー：『ニーベルングの指輪』における蒸気とオペラ演出について」

講師：グンドウラ・クロイツァー(イェール大学音楽学部准教授)

司会：中村仁(GCOE研究生)

通訳：福中冬子(GCOE研究協力者・東京藝術大学准教授)

クロイツァー准教授による二回目の講演では、特にワグナーと「霧」に光が当てられ、霧を用いた演出の意味、その演出が近代化する当時の社会を映し出している点が議論の中心となった。ワグナー研究の中でも論じられることが少ない側面に焦点が絞られ、示唆に富んだ講演会であった。

日時：2011年2月5日(土) 15:00～17:00

場所：早稲田キャンパス8号館305会議室

題目：「ドン・ジョヴァンニ初演の前夜に—ルイス・フルンベルクの描くモーツァルトとカサノヴァ」

講師：荒又雄介(大東文化大学専任講師)

カサノヴァ研究が進んで彼の草稿の中からオペラ台本の改作案が見つかったと、モーツァルトとカサノヴァの出会いや関係もあながち荒唐無稽な想像ではないと考えられるようになる。本研究会では、両者の関係を描いた作品の中でも特に文学的クオリティーの高いルイス・フルンベルクの小説 *Mozart-Novelle* (1947) が紹介され、そこで描き出されるモーツァルト像とカサノヴァ像が分析された。

また、下記の日程で、今後のオペラ/音楽劇研究を考える機会を設けた。

日時：2011年2月12日(土) 17:00～

場所：国際会議場4階共同研究室7

■17世紀フランス演劇研究会(オディール・デュスッド)

2011年3月に出版予定の『17世紀フランス演劇事典』の編集作業を進め、並行して下記の研究会を行った。

日時：2010年12月26日(日) 14:00～16:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

題目：「ポール・スカロンの作品と生涯」

講師：富田高嗣(GCOE研究協力者・長崎外国語大学准教授)

17世紀の喜劇作家ポール・スカロンの作品とその生涯を検討し、特に後期作品におけるドラマツルギーの変化を考察した。また同時代の劇作品との比較という視座において、スカロンの作品の独自性を探究した。

日時：2011年1月29日(土) 14:00～16:00

場所：早稲田キャンパス10号館101教室

題目：「牧人劇から牧人悲喜劇へ、『忠実な牧人』におけるヴァリーニの功績とフランス牧人劇への影響」

発表者：落合理恵子(GCOE研究生)

16世紀イタリアの悲喜劇と牧人劇の概念が紹介され、それをヴァリーニがどうとらえて『忠実な牧人』に実現されたかが示された。またこの作品の特徴に対するフランスの文筆家たちのコメントも紹介された。

(研究助手 奥香織・菊地浩平)

日本演劇研究コース：

活 動 報 告

■ 2010 年加賀藩能楽資料研究会 (竹本幹夫)

日時：第1回 2010年 4月24日(土) 13:30～15:00
 第2回 2010年 6月19日(土) 13:30～15:00
 第3回 2010年 7月10日(土) 12:00～13:30
 第4回 2010年 9月 4日(土) 13:30～15:00
 第5回 2010年 9月25日(土) 13:30～15:00
 第6回 2010年10月30日(土) 13:30～15:00
 第7回 2010年12月 4日(土) 13:30～15:00
 第8回 2010年12月18日(土) 13:30～15:00
 第9回 2011年 1月22日(土) 13:30～15:00

場所：早稲田キャンパス6号館演劇博物館応接室

本研究会は21世紀COE時代から続けてきたもので、通算7年目となる。研究会発足当初は棚町知彌氏(国文学研究資料館名誉教授)が収集された元禄期の能楽関連資料を輪読していたが、当該資料を読み終え、現在は第5代藩主前田綱紀に仕えた葛巻昌興の日記『葛巻昌興日記』(金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵)を輪読している。

月1回の研究会では、同日記の全文を読み、能楽関連記事及び芸能・文学関連記事を抽出する方法をとっている。日記が書き始められた延宝5年(1677)正月分から読み始め、現在延宝9年の途中まで読み進めた。これは、幕府将軍が4代家綱から5代綱吉に交替する時期に該当する。家綱死去による鳴り物

禁止期間を経て、綱吉将軍宣下祝儀能・老中招請能などに關する記事が増加しつつあり、後の加賀藩能楽隆盛の萌芽となる記事も散見する。今年度発行の『演劇映像学2010』論文では、延宝8年8月～同9年4月の能楽関係記事を翻刻・紹介した。

なお、研究協力者としてこれまで本研究会をリードしてこられた棚町知彌氏が、2010年7月20日に逝去された。謹んでご冥福をお祈り申し上げる。(GCOE研究生 江口文恵)

■ 第八回芸能の音声・映像資料についての研究会

日時：2010年12月10日(金) 19:00～21:00

場所：戸山キャンパス 33-2号館 演劇映像第2専修室(215号室)

講師：大西秀紀(立命館大学 GCOE 客員研究員)

「武智鉄二と演劇映像専修室蔵『武智コレクション』をめぐる」

日本演劇研究コースでは、児玉竜一(事業推進担当者)が主催する「芸能の音声・映像資料についての研究会」が活発な活動を行っている。12月の第8回研究会では、音声資料研究の第一人者である大西秀紀氏をお招きし、演劇映像専修室のなかでも最も重要コレクションである武智コレクションについて、GCOE研究生・大学院生を対象にご講演頂いた。武智コレクションと武智鉄二によるレコードに関する記述を資料として、最先端の研究によって明らかになりつつある初期レコード販売事情について講演と討議がなされ、参加者にとって非常に有意義な会となった。(研究助手 原田真澄)

芸術文化環境研究コース：

活 動 報 告

2010年秋から初春にかけて芸術文化環境研究コースで開催された研究会を紹介する。「文化外交再考」、「舞台芸術と人材育成」といった連続研究会を開催した他、「連続ゼミナール〈所有〉概念からアートと社会の関係性を考える」では、ゲスト講師を招聘し、より議論を深めることができた。

■ 文化外交再考 歴史的な形成過程と現在における課題 第3回 ドイツの文化外交政策

日時：2010年10月20日(水) 18:00～21:00

場所：早稲田キャンパス26号館3階302会議室

講師：トルステン・アルベルツ(東京ドイツ文化センター文化部長)

通訳：蔵原順子

昨年5月のフランス、6月のイギリスに続いてドイツ文化センターからゲスト講師を招き、ドイツの文化外交に関する研究会を開催した。同センターの歴史的な成り立ちを中心にお話を伺ったが、ドイツという一国家に留まらずEUへの貢献というミッションを掲げる点など、新しい視点も提示された。

■ 連続ゼミナール 〈所有〉からアートと社会の関係性を考える

日時：第5回 2010年10月25日(月) 19:30～21:00

ゲスト講師：立岩真也(立命館大学大学院教授)

第6回 2010年11月 1日(月) 19:30～21:00

第7回 2010年11月29日(月) 19:30～21:00

ゲスト講師：ブブ・ド・ラ・マドレーヌ(現代美術作家)

第8回 2010年12月 6日(月) 19:30～21:00

第9回 2010年12月13日(月) 19:30～21:00

ゲスト講師：北田暁大(東京大学大学院准教授)

第10回 2011年 1月24日(月) 19:30～21:00

講師：曾田修司(跡見学園女子大学教授)

場所：早稲田キャンパス26号館3階302会議室

前期のゼミナール参加者間での議論を踏まえ、後期は以下のゲスト講師を招いた。所有論を専門とする社会学者の立岩真也氏、女性と身体の所有をテーマに活動してきたアーティストのブブ・ド・ラ・マドレーヌ氏、気鋭の社会学者である北田暁大氏である。3名のレクチャーは、参加者がそれぞれ当ゼミナールのテーマについて考えを深める貴重な機会となった。

■ 舞台芸術と人材育成

日時：第3回 2010年12月3日(金) 18:30～20:30

講師：丹治陽(静岡県舞台芸術センター芸術局制作部)

場所：早稲田キャンパス26号館3階302会議室

日時：第4回 2011年1月29日(土) 15:00～17:00

講師：美山良夫(慶応義塾大学アート・センター所長、慶応義塾大学教授)

場所：早稲田キャンパス6号館318教室

聞き手：伊藤裕夫(富山大学教授、GCOE 客員講師)

同研究会の第3回は、静岡県舞台芸術センターの丹治陽氏を招いて、現場の文脈を離れて、日本の舞台芸術における人材育成の歴史という観点からご講演を頂いた。また、第4回の慶応義塾大学アート・センター所長の美山良夫氏からは、アートマネジメント教育に先鞭をつけた同センターの歴史的経緯や現在抱えている問題点についてお話し頂いた。

■ 都市と演劇 『完全避難マニュアル 東京版』をめぐる

日時：2011年1月12日(月) 18:30～21:00

場所：早稲田キャンパス26号館3階302会議室

講師：高山明(PortB主宰、演出家)

濱野智史(日本技芸リサーチャー)

聞き手：鴻英良(演劇批評家)

2010年の「フェスティバル/トーキョー」の中でも異色の作品として注目を集めた『完全避難マニュアル 東京版』から、演出家の高山明氏、作品のアーキテクチャを担当した濱野智史氏を迎えて研究会を行った。演劇批評家の鴻英良氏の巧みなリードで、同作品が当初の目的をどこまで達成しえたのか。そして、当初の枠組みをどう越えていったのかが明らかになった。

(研究助手 光岡寿郎)



東洋演劇研究コース：

活 動 報 告

■特別講義

【周慧玲氏特別講義】

日時：2010年11月13日（土）15:15～17:15
会場：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
講師：周慧玲氏（台湾・中央大学准教授）
題目：「芸術か産業か-台湾現代劇場の発展及び創造」

講師は、ニューヨーク大学にてRichard Schechnerに師事しパフォーマンス・スタディズを学び、現在は劇団「創作社」の主宰兼監督として活躍している。本講義では、台湾戦後の現代劇場（小劇場）の発展と創作活動についてお話しいた。1950～60年代の「反共話劇」の時代に生まれた作品の特徴、70～80年代のアメリカの商業劇場のやり方と評論スタイルが浸透する中での欧米の留学経験者と大学の若者を中心とした現代演劇のブームと、当時の文化政策の変化、90年代以降の小劇場論述の困難さや、実際の劇場活動と理論方針における矛盾など、各年代の発展状況と問題を解き明かす講演であった。

【現代中国演劇講座】

日時：2010年11月23日（火）13:30～18:30
会場：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
講師/題目：
陶慶梅氏（中国社会科学院副研究員）/「実験演劇と市場の弁証」
呂効平氏（南京大学教授）/「演劇創作と研究の現状」
解玉峰氏（南京大学教授）/「中国古典演劇の美学概念及び芸術構成」

各講師に中国当代の実験演劇（前衛演劇）と市場との関係や、当代中国演劇の創作の傾向、中国古典演劇の美学と構造の問題について講演をして頂いた。総合討論では、アジア演劇の共通性から中国・西洋演劇の違いまで幅広い話題と質問が提起されて盛んな討論が行われた。日中の学者による貴重な学術交流の場となった。

【葉長海氏・鄧元江氏特別講義】

日時：2011年1月22日（土）14:00～18:30
会場：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
講師：葉長海氏（上海戲劇学院教授）
題目：「昆曲と『牡丹亭』」

中国における最も古い芸能の一つである昆曲の発展と代表作である『牡丹亭』の作者と魅力について語って頂いた。文学作品としての価値のみならず、創作の時代背景や観衆の角度といった点について、著名な段の吟唱や舞台映像を交えてお話しいた。

講師：鄧元江氏（武漢大学教授）
題目：「日本の視点から見る梅蘭芳の美学への解釈」

本講演は、梅蘭芳の中国国内における舞台や演目が海外での公演と大いに異なったことへの指摘から始まり、これまでの梅蘭芳への評価や人物像の再検討という内容であった。近代中国京劇の偉人とみなされてきた梅蘭芳の人物像に、歴史的資料の再考証によってより客観的な視点を試み、演劇博物館所蔵の日本側の資料も用いることで、これまでの梅蘭芳研究では見えてこなかった点に光を当てていた。

■第三回共同ゼミ

日時：2010年11月13日（土）14:00～15:00
会場：早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）
発表者：黒田譜美（金沢大学大学院博士課程・GCOE 研究生）
題目：「『珍珠塔』物語の変容-清刊本『繡像考義真蹟珍珠塔』から魏含英演出本まで」

本年度の第三回共同ゼミでは、黒田譜美研究生が研究発表を行った。戯曲の一つである『珍珠塔』物語の流通と伝播について、通俗文学と曲芸・演劇の上演演目の二つの角度からアプローチしたもので、興味深い資料が多く提示された。膨大な戯曲の版本の調査と考察が必要な上、異なる種類の劇にわたる上演記録も多々あることから、古典から近現代文学・演劇という様々な分野の研究者から活発な意見が飛び交い、情報の提供が行われた。（研究助手 李宛儒）

映像研究コース：

活 動 報 告

■「日本の無声映画の紹介」

2010年、グローバルCOE映像研究コース研究生である我々は、松竹株式会社の後援により東京国立近代美術館フィルムセンターとの共同で“Le Giornate del Cinema Muto”（ボルデノーネ国際無声映画祭）における日本映画の特別上映を企画した。

この映画祭は、無声映画のみを上映する国際映画祭であり、毎年イタリアのボルデノーネで開催される。その始まりは、1981年に北イタリアでおこった地震の被災者を支援したいと願う学生らの活動に始まる。彼らによる古い無声映画の巡回上映活動は、その後郷里ボルデノーネで定着することとなった。そしてその規模は徐々に大きくなり、ボルデノーネは今では世界における無声映画の上映と再発見の最大の地とみなされるようになった。

東京国立近代美術館フィルムセンターと松竹株式会社の惜しめない協力によって上映が成し遂げられることとなった日本からの出品作品は、無声映画時代に松竹で活躍した島津保次郎、清水宏、牛原虚彦という三人の巨匠が監督した作品である。三人はいずれも昭和初期の松竹蒲田モダンイズム時代のスタジオスタイルの形成の中核となった人物であり、また現代劇様式の発展に寄与した人物といえよう。今回は、数年前に上映された数本の作品を除いた三人の監督の無声映画全作品を上映した。

このたび企画推進者をつとめることとなった我々は、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEの研究生としての資格を活用することにより、演劇博物館が、文献活用においてこの上なく貴重な拠点であることを実感した。演劇博物館の所蔵文献は、我々が映画祭における詳細な上映作品解説文を書くうえで不可欠な歴史的調査を十分に行うことを可能とさせた。演劇博物館所蔵の歴史的な記録文書と新聞を用いた解説文は、映画研究家と映画ファンという世界各国の多くの観客から多大なる評価を受けた。

この映画祭における解説文の多くは、上映される映画の説明が英文によって詳細に書かれている。我々はそれに加え、作品分析並びに詳細な出演者リストなどの史的資料を載せることができた。今回の企画推進者としての仕事を通じ、演劇博物館所蔵の文献は、日本の無声映画を国際的に広く紹介する助けとなると深く実感した。そしてこのように演劇博物館所蔵の文献を用いることができたことに改めて感謝の意を述べたい。

（GCOE 研究生 ヨハン・ノルドストルム、
オックスフォードブルックス大学講師 アレキサンダー・ジャコビー）

舞踊研究コース：

活 動 報 告

■バレエ研究プロジェクト（通称バレエ研究会）

バレエ研究会では第3回～第6回の研究会が開催された。舞台美術、ゴーチエの舞踊評、バロックダンスにおける記譜法、モーションキャプチャを用いたバレエ研究及びその応用と多岐に亘る観点からバレエに迫ることができた。

①「1946年帝国劇場バレエ公演『白鳥の湖』における藤田嗣治の舞台美術」

日時：2010年10月14日（木） 18:30～20:30

場所：26号館302会議室

発表者：佐野勝也（早稲田大学大学院文学研究科博士課程：GCOE研究生）

②「テオフィル・ゴーチエによる舞踊評

ーロマンティック・バレエにおける“バ”の可能性」

日時：2010年11月18日（木）18:30～20:30

場所：26号館302会議室

講師：小山聡子（慶応義塾大学非常勤講師）

③「舞踏記譜とダンス様式ーボシャン・フィエ記譜法を中心に」

日時：2010年11月25日（木）18:30～20:30

場所：26号館302会議室

講師：市瀬陽子（聖徳大学准教授）

④「三次元モーションデータのバレエ研究への応用」

日時：2010年12月9日（木）18:30～20:30

場所：26号館302会議室

講師：海野敏（東洋大学教授）

■ジェローム・ベル氏講演会（共催：芸術文化環境コース）

「ジェローム・ベルによるジェローム・ベル」

日時：2010年11月4日（木）18:30～21:00

場所：26号館地下多目的講義室

講師：ジェローム・ベル（振付家）

いまや世界中の劇場やフェスティバルに招聘されるダンス界の寵児といえる振付家のジェローム・ベル氏をお迎えして、経歴か

ら作品の創作原理までを語っていただいた。前半はベル氏が振付家となるまでの経歴が語られた。ダンスを学ぶ事を決意した経緯を、当時のフランスにおけるダンスの社会的・芸術的背景を交えながら語り、ダンスを中断して他の芸術分野に関心を寄せながら、ダンスに復帰し振付家となった決断が友人の死をきっかけとしたものであったことを明かした。後半は、作品の映像を上映しながらベル氏が作品を解説する形で行われ、ベル氏は作品毎の目的とその手段を明解に説明し、ベル氏の作品群が、あらゆる劇場的な制度を暴露し否定する「恐るべき子供」としての一貫した強い論理と、自身の観劇体験に基づく劇場形式に対するある素朴な信念「ここでしか起きないある特別な事が起きている」によって支えられていることが明らかにされた。

■舞踊研究コース研究会

「ダンスとオペラーオペラ作品にダンスを振付けることについて」

日時：2011年12月22日（水）18:30～20:30

場所：26号館302会議室

講師：大島早紀子（H・アール・カオス）

H・アール・カオスを主宰する大島早紀子氏をお招きして、近年のオペラ作品への演出・振付を中心に、作品創りについてご講演いただいた。前半部では、これまでのH・アール・カオスの活動を映像とともに振り返りながら、それぞれの作品の概要、背景説明や演出の工夫などを詳しく解説していただき、H・アール・カオスの作品が現代という時代の社会状況に対する批判的な視点から出発しながら、単なる絵解きにとどまらず高い完成度をもつダンス作品として結晶したことが映像から垣間見られた。後半部では特にオペラ作品への振付・演出に焦点を絞り、作品の映像を見ながら解説していただいた。それによって単にオペラ作品の中にダンスを挿入するというのではなく、ダンスとオペラが一体となった舞台が創り上げられていたことが分かった。20年以上にわたり日本のコンテンポラリー・ダンスを牽引してきた振付家・演出家の功績を振り返る貴重な会となった。

（研究助手 渡沼玲史）

新 刊 紹 介

『二世豊竹古靱太夫（山城少掾）義太夫名演集』（KKMS-2～11）

CD9枚、DVD1枚 解説リーフレット（138頁付）

協 力：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

発売元：日本コロムビア（株） 販売元：（株）紀伊國屋書店

価 格：30,000円（税込）

発売日：2010年11月27日

これは、近代の義太夫節に多大な影響を与えた二世豊竹古靱太夫（後の山城少掾）の、おもに1920年代の音声と映像を集めたCD・DVDボックスである。CDは、20年程前に国立文楽劇場が復刻して発売した「勘平腹切」「合邦」「阿古屋琴責」「引窓」と、当時同劇場が復刻作業を続けていた「寺子屋」「又助住家」「壺坂」「袖萩祭文」「二月堂」を合わせた9枚。これに、演劇博物館グローバルCOEがフランスのアルペール・カーン博物館から入手し、2009年12月に研究報告会を行って初めて公にされた映像『MARIONNETTES JAPONAISES』のDVDが加わる。

映像については、無声のオリジナルだけでなく、字幕の翻訳と解説ナレーションを付したものと、及び当時のレコードの音声と映像に合わせたもの（妹背山道行の一部）が、「特典」として収められている。今月（2011年3月）には日仏二ヶ国語による「報告書」も出来上がるので、この映像がより多くの人の目に触れ、90年近い時を隔てた文楽の世界に思いを馳せていただけるようになるのは、当事者の一人として嬉しい限りである。演劇博物館グローバルCOE事務局の理解と、日本コロムビアの採算を度外視した英断に感謝したい。なお本ボックスは、平成22年度文化庁芸術祭記録部門の大賞を受賞した。

（GCOE研究協力者 桜井弘）



『公共劇場の10年 舞台芸術・演劇の公共性の現在と未来』

(伊藤裕夫・松井憲太郎・小林真理編、美学出版、2010年11月発行)

本書は、当グローバルCOE芸術文化環境研究コースが2008年2月に開催したシンポジウム「公共劇場の10年」をもとに、シンポジウムでは十分に語り尽くせなかった点や、当日呼びできなかった公共劇場関係者ならびに海外の劇場事例を盛り込むとともに、その後の「劇場法」等の動向にも触れてまとめたものである。第1章では、公共劇場の「公共性」についての検討、第2章では水戸芸術館以降20年の代表的な日本の5つの公共劇場における取り組み、第3章ではフランス、ドイツ、シンガポールにおける公共劇場の状況、そして第4章でこれからの公共劇場という形で「劇場法」も含め論じている。また本書の大きな特徴として1992年以降の公共劇場に関連する事項と、新国立劇場を始めとする7つの公共劇場の主催事業をまとめた100頁に及ぶ年表が収録されており、舞台芸術関係の資料の整備が遅れているわが国では、今後にむけての貴重な資料となると言えよう。

(GCOE客員講師 伊藤裕夫)



『Théâtre/Public』198号 (日仏芸術交流特集号、2010年12月発行)

本書は、GCOE拠点全体企画として2009年11月にフランス・パリで開催された国際シンポジウム「演劇・舞踊・芸術環境 日仏交流の20世紀 *Scènes françaises et japonaises de 1900 à nos jours : allers-retours*」の成果をまとめたものである。フランスの演劇専門雑誌 *Théâtre/Public* の特集号として刊行された。舞台芸術分野における日仏交流の歴史と現在、翻訳やコラボレーションをめぐる諸問題、そして交流を支える制度と環境が、研究・実践の両面から多角的に検証されている。渡邊守章氏、ジョルジュ・バニュ氏のような「歴史的」研究者から現在博士論文を準備している若手の研究者まで、多世代、多国籍の研究者によってまとめられた本書は、日仏間に留まらない国際学術交流と舞台における芸術交流をより深めるきっかけともなるだろう。

(研究助手 奥香織)



2010年度第二回グローバルCOE博士論文成果報告会

日時：2011年3月18日 (金) 10:00～17:10

3月19日 (土) 13:00～17:50

会場：国際会議場3階第一会議室

プログラム (※入場無料・予約不要 使用言語：日本語)

【3月18日 (金)】

- ① 10:00～11:10 落合理恵子
(西洋演劇・17世紀フランス演劇研究会、京都大学 (人間・環境学))
「<フェッラーラ牧人劇>研究 ジラルディ=チンツィオの『エグレ』からグアリーニの『忠実な牧人』まで」
- ② 11:10～12:20 榎本恵子
(西洋演劇・17世紀フランス演劇研究会、パリ第四大学)
Plaute et Térence en France aux XVI^e et XVII^e siècles (「16、17世紀フランスにおけるプラウトゥスとテレンティウスの受容」)
- ③ 13:30～14:40 本多まりえ
(西洋演劇・シェイクスピアゼミ、早稲田大学 (文学))
Henry Chettle's Careers: A Study of an Elizabethan Printer, Pamphleteer, Playwright (「ヘンリー・チェトルの職歴：エリザベス朝のある印刷工・パンフレット作家・劇作家の研究」)
- ④ 14:40～15:50 大木絢深
(西洋演劇・シェイクスピアゼミ、聖心女子大学 (文学))
Another "Fellow of Infinite Jest": Translating Mercutio's Mercurial Language (「マキューシオを翻訳する一坪内逍遙の初期『ロミオとジュリエット』訳におけるマキューシオの再検討」)
- ⑤ 16:00～17:10 松田智穂子
(西洋演劇・シェイクスピアゼミ、一橋大学 (学術))

Derek Walcott's Theatrical Works and His Challenges as a Postcolonial Caribbean Man of Theatre (「デレク・ウォルコット・ポストコロニアル・カリブの演劇人としての挑戦とその演劇作品」)

【3月19日 (土)】

- ① 13:00～14:10 木村 涼
(日本演劇・近世演劇研究、法政大学 (歴史学))
「七代目市川團十郎の社会史的研究」
- ② 14:10～15:20 秋野有紀
(芸術文化環境、東京外国語大学 (学術)・ヒルデスハイム大学 (Dr. phil.))
「自治体政策の課題としての文化的生存配慮—フランクフルト・アム・マイン市における1970年以降のミュージアム政策を例に」
“Kulturelle Daseinsvorsorge” als Aufgabe der Kommunalpolitik—Eine Untersuchung der Frankfurter Museumspolitik seit 1970.
- ③ 15:30～16:40 上田 学
(映像、立命館大学 (文学))
「興行形態に基づく初期映画観客の研究—東京市の事例を中心に—」
- ④ 16:40～17:50 平野恵美子
(舞踊、東京大学 (文学))
「バレエ《火の鳥》の起源：20世紀初頭ロシア文化と帝室劇場」

編集後記

ニューズレター第10号をお届けします。12月1日より研究助手として着任いたしました。よろしくお申し上げます。これからもグローバルCOEの多岐にわたる活動を伝えていきたいと思っております。

(研究助手 山本律)

News Letter 第10号

2011年3月15日

編集：山本律 奥香織 菊地浩平 大傍正規 原田真澄 光岡寿郎 李宛儒 渡沼玲史

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL：03-5286-8110

URL：http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html